

藤沢がもし100人の村だったら

インターネットを中心に広まった物語に、「世界がもし100人の村だったら」があります。

この話をに藤沢にあてはめてみました。さて、藤沢のどんな課題が見えてくるでしょうか

藤沢市には40万人の人がいますが
もしそれを100人の村に縮めるとどうなるでしょう

100人のうち

50人が男性、50人が女性です

でも藤沢市の部長以上に、女性はひとりしかいません

14人が中学生以下の子どもで

18人は65歳以上のお年寄りです

そのうち7人は、75歳以上の「後期高齢者」です。

お年寄りの割合はこの10年で1.5倍に増えました



お年寄りのうち、2人はひとり暮らしをしています

「高齢化」は、藤沢でも進んでいます

1年の間に、1人が亡くなりますが

赤ちゃんも1人生まれます

出生率は藤沢では、あまり減少していません

でも、3年前に11あった産婦人科や助産院は

いまでは6つになってしまいました

赤ちゃんを産む場所が見つからない「お産難民」の問題は、藤沢でも深刻です



97人はいわゆる「健常者」ですが

3人は何らかの「障害」を持っています

「障害」を持つ子どもの数は増え続けていて

白浜養護学校はもう満杯になっています

高齢や「障害」で介護を必要とする人は2人です

98人が日本人で

2人は外国人、または外国につながりを持つ人で
湘南台小学校の日本語教室には

ペルー、ブラジル、アルゼンチンなど、

13の国籍を持つ子どもたちが通っています

でも、市内にスペイン語の表示はほとんどありません

13人が鵠沼に住んでいます

10人が藤沢、10人が善行、9人が辻堂の住人です
一方、いちばん広い御所見に住むのはたった4人です

93人が公共下水道を利用していますが

7人はまだ下水道が使えません

46人が働いています

そのうち、1人は農業や水産業

12人は工業

33人は商業やサービス業で働いています

でも、働きたくても仕事がない人も、3人います
失業率は、この10年で倍に増えました



100人のうち1人は生活保護を受けています

藤沢は所得水準の高い人も多い一方

生活保護を受ける人の割合も増え続けています

「格差」は、藤沢でも広がっています

少子高齢化、介護、ゴミ処理、再開発

藤沢も、たくさん抱えています

みなで考えなければならぬことも少なくありません
でも

選挙権を持つ人は78人

このうち、市長選挙の投票に行ったのは28人でした

どうか一緒に考えてください

この100人の村が

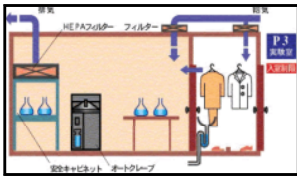
もっとすてきな村になるように

武田新研究所の「P3施設」とは？

何が問題なの？

村岡の武田薬品工場跡地に、あらたに新薬開発の研究所が建設されることになりました。ところが、この研究所の中に「P3レベル」の研究施設が含まれていることがわかり、論議を呼んでいます。

この「P3施設」とは、炭疽菌やHIV、新型肺炎（SARS）などたいへん危険度の高い病原菌などを扱うための施設です。



▲「P3施設」の概要図

もちろんこの「P3施設」は厳重に隔離され、廃棄物や排気、排水にも何重もの処理が行われます。

とはいえ、人間の行うことである以上、万一の事故の可能性はゼロとはいえません。また、想定される大震災やテロへの対策も考えておかなければなりません。

さらに、研究所からの排水は処理を行った上で下水道に排出され、大清水下水処理場に流入する計画です。この排水のチェックも問題となります。

「P3施設」自体は、茅ヶ崎の県立衛生研究所をはじめ、全国にも多くの施設が設けられています。

しかし、日本の場合は十分な立地規制がありません。そのため、大阪府の吹田市のように独自の規制条例を設けた自治体もあらわれています。

藤沢市も私たちの会派の質問に対して、今後、武田との間で実効性のある協定を締結する考えを示すとともに、県に対しても要望書を提出しました。

武田の研究所でまず取り組まれる研究は、ガンの治療薬の開発だそうです。今後、新型インフルエンザのワクチンの製造など重要な役割も担うはずですが、その大切さを否定しているのではないのです。

ただ、荏原からのダイオキシン流出という苦い経験を持つ藤沢です。しっかりとしたルールをつくり、徹底した情報公開のもとに周辺住民のみなさんとの信頼関係を築くことは、武田にとっても有意義なことではないでしょうか。

もしそれができないのであれば、私は現状のままの「P3施設」の設置には疑問を持ちます。



ゴミ処理有料化から1年、可燃は19%減

「ゴミ処理の有料化」開始から1年がたちました。

この「有料化」の目的は、あくまで「ゴミの排出量をできるだけ減らすこと」です。



女坂最終処分場

藤沢のゴミ最終処分場である女坂処分場は、今のままではあと30年で限界を迎えます。女坂が満杯になれば、藤沢に処分場の用地はもうないのです。

もちろん、多くの方が極力「ゴミ」を減らし、分別して「資源」化に努めてくださっています。

しかし、それでも藤沢市の資源化率は06年度で26.3%と、まだ決して高いとは言えませんでした。

「有料化」の結果、今年9月の集計では可燃ゴミは約19%、不燃ゴミは約40%の減量が達成されました。「ゴミから資源へ」の流れを進める上で、「有料化」は、たしかにひとつの有効な手段ではあるのです。

もちろん、多くの課題も残されています。

小規模な自営業の方の負担軽減や、資源化率の向上なども課題です。有料化以外に本当にゴミ減量の手段はないのかなど、実施後「3年」を目途に、あらためて検証されなければなりません。

どうぞ、みなさんのご意見をお寄せください。

最近の夏の記録的な暑さから、あらためて環境問題について考えた方も少なくないと思います。地球が、私たちに警告しているのかもしれないですね。

女坂処分場が満杯となるまであと30年。私たちは、未来の子どもたちにどんな藤沢を残せるのでしょうか。

環境問題へのとりくみは、行政と市民のみなさんの協力なしには成り立ちません。これからも、一緒に考え、とりくんでいきましょう。

